困った時のヤス谷君

加茄味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
困った時のヤス谷君

【Ｎコード】
Ｎ４５８１Ｔ

【作者名】
加茄味

【あらすじ】
ある日、隕石かと思ったら空から美少女が降ってきたヤス谷君。
その日から周りの身近な人間が、漫画や小説の主人公のようになってしまった！
一体どうして！？
ブログとの重複投稿です。

「――恐怖の大王でも数十年遅れてやってきたのかって夜空だな」
右手にはつい先ほど買った今晩のおかずが入っているスーパーの袋。
左手には学園指定の黒い手提げ鞄。
中肉中背。服装は薄手のコート、黒い学ランに灰色のスラックス。
「カッ！」と大きく見開かれたツリ目。男子としてはそれなりに長いヘアスタイル。仕草はどことなく不良臭いが、見た目だけなら健全な優等生という風貌だ。幼少時からよく渾名をつけられており、今では渾名の数だけならば学園一位にもなれると豪語する一般男子高校生、ヤス谷が家路に着いている時のことだった。
肌寒い季節だからか、夕時ほどなのに空にはすっかり月が上っている。星がいつもの二割増しぐらいの光を放ちながら、――何故か大量に落下していた。
流星群というやつだろうか。燦々と光が降り注ぎ、粛々と燃え尽きて消えていく。どことなくノスタルジックで、世界の終りを連想させられるような光景だった。それを眺めるのに夢中で、ヤス谷はすっかり家路につくのを忘れ、ブロック塀に挟まれた路地で棒立ちになっていた。
そんな時だった。
空の中心（正確には視界の中心）に黒い丸のような物体がポツンと現れたのだ。
「何だ？　あれ」
その●はどんどんと秒単位で大きくなっていく。
何かしらの形であると気づいた時には、視界の九割が不自然な黄緑色と布地にプリントされた熊ちゃんで占められていた。
その直後、ヤス谷の顔面に超高校級のサッカー部員が全力で蹴ったボールがぶつかったときのような衝撃が走る。

「うわらばっ！」
衝撃でおもわず尻餅をつくヤス谷。
思わず荷物から手を放してしまい、白と黒の物体が勢いよく地面に投げ出される。
逆お椀型にひしゃげたスーパーの袋からは『お手製！』と銘打たれた市販コロッケの袋が口からはみ出し、衝撃で留め金が外れた学生鞄からは教科書とノートがだらしなくばら撒かれる。
「いってぇ……！」
「おっとすみませんねー大丈夫ですか？　一応衝撃は半重力装置で抑えましたから、大事には至っていない筈ですが。まあこんな所にボッと突っ立ってたのが悪い訳ですしー自業自得ですねっ！」
頭上からＳＦチックな固有名詞の入った台詞を話す、シュークリームのような声。
ぶつかった何かは頭上を乗り越え、自分のすぐ背後に墜落したはず。
何の音もしなかったが。
空から降ってきた何かが喋る――、宇宙人としか思えない。
ここは振り返ったりせずに脱兎のごとく逃げ出すが正解なのだろう。しかし残念なことに、いつもは行動より先に考えるタイプなのに、ヤス谷は躊躇なくえびのように仰け反って頭上を見上げてしまった。好奇心って危ないよね。
まず初めに目に入ったのは黄緑色の、秘部を覆うための布状の物体だった。
「――パンツッ！」
「何見てるんですかっ！？」
刹那、陶磁のような白い手がそれを隠したかと思うと、黄緑色の桃源郷は急速に後ろへと離れていき、暗闇のベールに包まれ見えなくなってしまった。ちなみに暗闇のベールとは紺を基調色としたチェック柄のミニスカートの事である。どうやらさっきまでそれの真下に居たようだ。

そこはかとなく、距離が離れたことにより、落ちてきた宇宙人の全体像が露わになる。
背身長は目視で一五〇程度。痩せ気味。
やけにメタリックな質感を持つ銀色のパーカーを着ており、付属のフードをやんわりと被っている。左右で長さの違う白黒模様のニーソックスを穿いており、ミニスカでもそれほど寒くなさそうだ。そう見えるだけかもしれないが。フードから垂れ下がる髪は股に届くぐらい長く、新芽のような淡い緑色だ。可愛らしい童顔で、双眸は紅葉のように鮮やかな深紅に染まっている。
見た目からして、非常に非現実的な雰囲気を持つ少女だった。
というか、夢か妄想の世界に入り込んだとしか思えないような美少女だった。
「――理解した。これが世にいう『空から女の子が落ちてきた』って事かッ！」
ぶっ飛んだ展開に遭遇しながらも、妙に的を得ている発言をする安岡。冷静である。単に思考がそれこそぶっ飛んでるだけかもしれないが。
そんな状態のヤス谷を蔑んだような目で見下ろす少女。腕を組み、自然な流れでポーズまで決めている。
「なーんかテンション高いですねー。パンツですか？　私のパンツ見ちゃったからですか？　こんなこと言うと何だか自意識過剰っぽいけど責任とってくださいっ！　具体的には慰謝料払いやがれ！」
「そ、そんなっ！？　これは罠だ！　不可抗力だ！　俺に罪は無いっ！」
「払ってくれたら、もう一回パンツ見せても……なんて。いやんっ☆」
「何だ今のぶりっ子」
きゅるるるるるるるる～。
その時、少女の腹部が携帯のアラームほどの音量で鳴った。
「くぅうぅぅ……、異空間移動の影響やら次元情報の取得やらで、

お腹が減りました……」
少女は顔を真っ赤にして腹部を抑える。年頃の乙女として当然の行動だろう。
匂いを嗅ぐかのように鼻をひくひくと動かし、何かを探すかのように辺りを見回し始めた。これは乙女の行動じゃない。
ヤス谷は一体何を探しているのだろうと、しばらく見守っていた。
だが少女が地面にしゃがみ込み、『お手製！』市販コロッケの袋を探り始めると、急いで立ち上がって、少女の手からそれを奪い取った。
「あ！　私のご飯を！　返せ、この野郎！」
「何言ってんだ、これは俺の晩ご飯だ！　欲しけりゃうちの食卓まで来い！」
「え、宜しいんですか？」
想定外のことを言われたようで、期待と驚きを顔に滲ませ、ヤス谷を見上げる少女。
どうやら空から落ちてきたくせに、今後のことを全く考えてなかったようだ。そもそも今後のことを考える人間は空から落ちてこない。
ヤス谷もよもや本気にされるとは思っていなかったので、冷や汗をかきながら後ずさる。
何せ相手は空から落ちてきた謎の美少女だ。夕食に招待していいものか大いに迷う。
そんな様子を嗅ぎ取ったのか、少女は腹部にある、パーカーの大きなポケットから、どう見てもポケットに入らないだろう数十センチ程の長さを持つ、やけにメタリックなL字型の杖を取り出した。
それを誰もいない道先に向けた。
「――エレクトリックは大切にっ！　えいっ☆」
閃光。
何らかの大きな衝撃が走ったかと思うと、数瞬遅れて、武々しい暴風が巻き起こり、コンクリートの地面が何メートルか先まで一直

線に抉れていく。
その威力はさながら戦闘民族のエネルギー弾そのものだった。
最終決戦兵器の威力を存分に見せつけると、少女はそのまま杖をヤス谷の足元に向けつつ、ハリウッド映画における逮捕シーンのような公言を高らかに宣言した。
「一、あなたは目の前の異世界航行生命体に食事を与える権利があります。
二、あなたは目の前の異世界航行生命体に宿を与える権利があります。
三、あなたは目の前の異世界航行生命体に綺麗な服を与える権利があります。
四、あなたは目の前の異世界航行生命体に手頃な娯楽を与える権利があります。
理解しましたか？　ＯＫ？」
「何言ってるかさっぱりだが、俺が今窮地に立たされているということだけは理解した」
ヤス谷は両手を頭上に掲げながら、直立不動の姿勢。少女はＬ字型の杖を構えつつ、うっすらと微笑を浮かべる。
その微笑は囚われの姫君が白馬の王子に手を差し延ばされているかのような、深い幸福感に包まれていた。
年頃の男性が見れば『ああ、俺がこの娘を幸せにしてやろう』と思うような淡い毒気を濃厚に含んでいる微笑だ。しかし、ヤス谷にとって、幸か不幸かそんな毒気は屁でもなかった。
デス・オア・（恐らく）史上最恐凶悪電波宇宙人お持ち帰りの二択にさらされた彼にとっては……。

朝。八時三十分。
その時間帯は即ち登校時間であり、少なくともヤス谷に対してそれ以外の意味を持たない時間帯である。そんな時間帯を含んでいる

朝に対して「爽やかな～」とか「気持ちの良い～」などという余計な修飾語をつける必要などどこにも無いのである。
ただし一口に登校時間、と言っても色々ある。
今から登校「を始める」時間から、殆ど登校「し終わった」時間まで幅広くだ。
個人差や季節による変化はあるだろうが、八時三十分はヤス谷にとって、登校「途中に近所のコンビニで昼食の弁当を買い終え、廊下側最前列にある自分の席で、何センチか前にある学園の備品である電気ストーブで暖まりながら、それに群がって小動物のように温まる女子達にうざったらしいやら気恥ずかしいやら微妙な感情を湧き上がらせつつ、図書室で借りたライトノベルをブックカバーもせずにＨＲが始まるまで堂々と読みふける」時間だった。
いつも通りならば。
今日は若干いつもと違った。いや、いつもと違うのは昨夜からなのだが。まあそれは置いといて。
後ろの席に普段座っているクラスメイトの名前は根倉さん。
長い前髪で顔を覆い、暗くて影が薄い印象を与えるものの、なかなかの美人と男子に好評の女子生徒である。
ヤス谷と同じで、いつもこの時間帯、根倉さんは席に座り、クトゥルーとかホラー系の小説を読みふけっているはずなのだが……。
今日に限っては、後ろに座っているのは根倉さんではなく、根倉さんと同じ髪型をした半漁人だった。若干違うどころの話ではない。全部違う。
「ギョギョ！　ギョギョギョギョ！」
根倉さんの髪形をした半漁人が、頬から生えているウーパールーパーのような鰓をはためかせて、はりのある野太い声で鳴いている。
後ろから聞こえてくる「ビチビチ」音。半漁人の鳴き声。
周りのクラスメイト達はというと、教室にセーラー服を着た半漁人がいるというのに、誰一人として騒ぐ人間はいない。寧ろ、率先して半漁人に話しかけるような奇特な奴までいる。

この状況に柔軟な思考に定評のないヤス谷が、「ああ、俺って疲れてるんだな。昨夜のこともあるし。じゃあこの半漁人は幻影か」という結論に達するのは当然の事だった。

思えば、早朝出会ったコンビニの店員からしてはちきれんばかりのブルーベリーみたいな巨人だったし、窓際の席にいるクラスメイトも触手をうねらせる超現実的植物に見える。何らおかしな結論ではない。

目の前の女の子もよくよく見れば、神々しい美貌を持ち、耳が独特の形をしている、エルフのようだ。昨夜の事だってきっと白昼夢か何かだったに決まってる。

ヤス谷は決意した。

担任の姿まで変に見えていたら今日はもう早退しよう――と。

そんな決意を知ってか、知らずか、軽快な音を立てて教卓側にある扉が開かれる。

無論、担任である鍵宮先生だった。

身長はかなりの長身。野球部の顧問兼監督な為か、着やせしているものの結構な筋肉質である。

服装は、モダンな模様が編まれている手編みセーターに灰色のスラックス。角ばった黒縁眼鏡に茶髪の坊ちゃんカットという特徴の、文系なのか体育会系なのかよく解らない印象を受ける容姿はともかく、性格は黙々とした植物のような人格で、生徒からはよく「何考えてるのか分からん」と言われる、まあ良くも悪くも教師らしい教師だ。

扉を通ろうとすると、突如ごつん、という音がして鍵宮先生は立ち止った。

背が高い為、頭を下げないと教室に入ることが出来ないのだ。

いや、どれだけデカいんだよ。

「……あれ？　さすがに鍵宮先生そこまでデカくなかった様な……」

教卓側の扉はストーブの横、ヤス谷のほとんど目の前にある訳だ。

つまり鍵宮先生が目と鼻の先に見えるわけだが、どう見ても全長

が扉の許容範囲を超えているとは思えない。
いったいどういう事かと思ったが、鍵宮先生が頭を下げて、再度扉を通ろうとしたときにその理由は分かった。
鍵宮先生の頭の天辺に、樹齢何年か程の若木が生えていたのだ。
「先生、体調がすごぶる悪いので早退します」
ヤス谷はすかさず席から立ち上がり、帰宅の準備を始めたが、熱も無いのに帰らせてもらえるはずがなかった。
降りかかる幻覚に対処するただ一つの方法は見ない、聞かない、関わらない事。
そう悟ったヤス谷は、時間割に移動教室が無いことを確認し、放課後まで完全に眠り込んでいた。
途中何度か教師に起こされたが、速攻で二度寝を決め込んだ。
成績が心配だ。
しかし、そんな怠惰なる休息もつかの間。
半魚人やらエルフやら超現実植物も帰った放課後。
ヤス谷は未だ机に伏して眠っていた、のだが…。
「いってぇ！！」
突然の衝撃に跳ね起きるヤス谷。
目の前には、手刀を胸の前で構えている、半漁人などに比べれば全く普通の同級生女子。どう見てもこいつの仕業である。
身長は一七〇前半。ヤス谷とほとんど同じ身長だ。肉付きは付いている所はキチンと付いているという感じ。
腰まで伸びるつややかな黒髪を両サイドで纏めたツインテールに、文学少女を思わせる黒縁眼鏡。
黒いセーラー服に灰色のスカートという制服姿。
もはやスタイリッシュさにすら思える曲線美。それを覆う黒タイツ。
顔は、端正ながらも「してやったり」というどや顔。ちょっといらっとする。
エルフに変わっているだとか、巨人になっているという事はない、

普段通りの元気溌剌な姿だ。安心、安心。
彼女の名前は、百百春斗真。
ヤス谷の所属する文芸部の部長にして、学園のご意見番兼相談役兼お昼のパーソナリティでもある、ツッコミ系学園アイドル（自称）だ。
自称が取れないのは、ツッコミ系自称してるのにアイドルって認められちゃ駄目だよね、的なお約束の為である。
正直お前はアイドルより芸人のほうが似合ってるよ。
ガツン。
そんなヤス谷の内心に感づいたのか、再度手刀で頭をガツンと殴られる。
無論、本気で殴っているわけではないので、小学生のパンチ程度の痛みだが正直勘弁してほしい。切実。
「何すんだよ」
「いっやぁ～、鍵せんからヤス公が爆睡してるって聞いたから見に来たんだけどさ。ほんとに爆睡してんじゃねぇぞてめぇ。今何時だと思ってんだよ。放課後だぞ、ほ・う・か・ご。部活が始まる時間ですぜ？　ＯＫ？　ＯＫ！？」
鍵せんは鍵宮先生のこと、ヤス公はヤス谷のことだ。人に渾名をつけずにはいられない。それが百百春の定めだった。
渾名症候群である。
「それにしても今日はテンション高いな、お前」
「そりゃあテンション高くならない訳にはいかんでしょ。見てよこれ」
そう言うと百百春はおもむろに懐から新聞を取り出し、机の上に広げた。
こう表現するといかにも常識人らしい行為に聞こえるが、懐から取り出すという処、正確にはセーラー服の襟に自分の手を突っ込んで新聞を取り

出すという、さながら変態的な行為を行っているわけである。
しかし百百春にいつもと違うとことは全くない。
これで通常運営である。
まさか、朝からずっとそこに新聞入れてたわけじゃないよな。
新聞紙には、見出しに大きく「異変！？　予期せぬ流星群！」と赤文字で書かれている。どうやら昨夜にあった流星群の記事らしい。
「ああ、昨日の流星群ね。これがどうしたんだよ」
百百春ぐらいなら確かに少々騒ぎかねない記事だが、幾分ヤス谷はもっとレアなものを昨夜観測し、持ち帰ってしまってるのだ。
騒ぐ気も起きない。
「ふっふっふ、私が流星群ごときで騒ぎ様な風流雅な人間だと思ってたのかな？　ちゃんと隅々まで読みなよ。面白いことが書いてあるよ」
「俺はお前より面白いものを見たことが無いよ」
皮肉を言いつつも、渋々新聞を読みふけるヤス谷。退屈な文章を流し読みしていく。
正直、百百春が喚きそうな事は書かれていなさそうだが――。
ふと、とある文章に目が留まる。
そこには要約すると、「この近隣の山並に隕石が墜落らしいけど、クレーターしか見つからなかったらしいよ」という内容が書かれてあった。
「おい、百百春……この記事のこの部分……」
「やっぱり分かるー？　さすがヤス公、お目が高い！　他の部員はその部分に書かれていることの違和感と秘密とミステリーに全く気付かなかったんだよー。ていうか、気づいてても無視してたんだと思うけどね！」
興奮して、バンバンと机を叩く百百春。
動きと共に胸の双丘に振動が走るが、さすがにたわわに揺れるほどの量は無い。せいぜい震度3ぐらいだ。
そしてその程度ではヤス谷は動じない。

何故ならこれで通常運営だからである。
「いや、気にはなったんだが、俺にはこの記事の何がおかしいのかさっぱり分からないんだけど。説明してくれ」
「えー、何だよそれー。説明しないとダメなの？　分かんないの？」
その時、唐突に教室の外から、涼しげで柔らかな声が聞こえた。
「へぇー。それじゃあ私たちにも説明お願いしてもらおうかしら？　部長」
「そ、その声はっ！」
百百春がオーバーリアクションに扉の方向に振り向くと、そこには二人の、超現実的植物と比べれば全く普通の同級生が、奇妙なポーズを決めて開いた扉の枠にもたれていた。
一人は百百春とは全く似ていない、いや寧ろ対極に位置する人格を持つ、文芸部の副部長。
銅杏楓だ。
身長は一六〇ほど。百百春より少し低い程度。スレンダーな体付きで本人はそれを悩んでいるらしい。良いと思いますけどね。
学則に引っかからない程度に薄く染めた茶髪のショートカットに、百百春と同じセーラー服。すらっとした美脚に黒ニーソックス着用。常識だよね。
百百春よりもさらに端正で可愛らしい顔つきをしているものの、それゆえに美人特有の自身と驕りが見え隠れする。いかにもお嬢様といった感じだ。
もう一人は文芸部の特攻隊長にて、荒事専門、元野球部。
兎南木小南。
身長は一八〇ほど。正直文芸部では一番でかい。体付きも元野球部だけあって、かなり筋肉質だ。それでも鍵宮先生の方がデカイが。
野球部では確実にありえない金髪ウルフカット＋長い前髪。文系部活をエンジョイしているとしか思えない。学則で謹慎受けると思うのだが。

服装はヤス谷とおなじ学ランで、顔には爽やかさを感じる微笑を浮かべている。何というか一瞬でCVが決まりそうな人物だ。
「いや、何で二人ともジョ○ョ立ちなんだよ」
「出番じゃない、座ってろヤス公」
「俺、一応主人公なんだけど……」
百百春に言われ、渋々と座るヤス谷。
ツッコミ役として我慢できなかったのさ。
初登場のインパクトは十分にとれたと思ったのか、銅杏はいつも通り仁王立ちに。兎南木はいつも通り、片手をポケットに突っ込み、学ランを鷹のように広げると、前髪を弄り始めた。皆さん通常運営である。
ビシッ！
銅杏はさながら弁護席にでも立っているかのように、人差し指を百百春に突き付け、堂々と意義を主張する。
「大体ね、斗真！　そんな新聞紙渡されて『謎だ、怪奇だ、ミステリーだ』なんて言われて分かる訳ないじゃない！　もっとしっかり説明しなさいよ！」
何となくテンプレ臭がするお方である。
しかし言っていることは間違っていない。その意見にはヤス谷も同意するところだ。
「それより三人とも。さっさと部活動、やりませんか？」
「黙っててよ、うな君」「下がりなさい、小南」「というか帰れよ、兎南木。俺のハーレムが完成するから」
三者三様に手を使って、軽くゼスチャーしている。「ＳＴＯＰ」
「下がれ」「―放送できません―」だ。
「やれやれ……」
困ったように、大げさに首を振る兎南木。いつもの事なので全く気にしていない。
「話を戻すけど、しっかりと説明してもらおうじゃない、百百春」
百百春は、もったいぶった感じで指を振る。同じようにツインテ

ールも揺れている。
「ふ、ふ、ふ、こんなの簡単だよ。良い？　隕石が落ちた筈なのに、それが見つからなかったという事は……、隕石自身が動いたという事！」
「つまり？」
「つまり、隕石は地球を征服するために振ってきた宇宙人だったんだよ！」
「……」
「……」
「……」
『な、なーんだってー！？』
　他にも誰かが持って帰ったとか、小さくなりすぎて転がって行ったとか、可能性はありそうだが、ヤス谷達文芸部員は気づかない。
　気づくような部員が居れば、そもそも百百春は部長になれてない。
「そういう事だからさ。これアレじゃない？　調べたら良い記事になるんじゃない？　他にも半漁人やら、青い何かを見かけたとかそういう目撃情報もあるし」
「あー、それは良いですね。最近ネタが無いので不評だったんですよ。学級新聞」
　ヤス谷の文芸部は単なる文芸部として活動しているわけではない。新聞部、放送部、その他もろもろのマイナーな部活動を吸収合併して存在しているのだ。その為、月に一度は学級新聞を発行するし、昼休みには土日に取りためしている少々痛々しいラジオ放送まで行っている。総合メディア部なのだ。
　代わりと言ってはなんだが、部をあげて何かしらの大会に参加したりすることは無い。浅く広くが部のモットーだ。
　生徒の間ではそんな学園における殆どのメディアを取り締まっていることから、文芸総合メディアクラブ、通称ブソウなどと呼ばれている。
「馬鹿馬鹿しい。あたしは帰るわよ」

「俺も用事あるし帰るわー」
ヤス谷が鞄を持ち、教室のドアから出ようとすると、「馬鹿馬鹿しい」とか言っていた銅杏が、足を自分が寄りかかっていない方の淵に掛けて、文字通り足止めしてきた。
「あのー、銅杏？　邪魔なんだけど……。ていうかお前も今馬鹿馬鹿しいとか言ったじゃん」
「何で、あたしは帰れないのにあんたが帰れる訳？」
「帰ればいいじゃん！」
「あたしには副部長としての責任があるのよ！　一応！」
ヤス谷と銅杏が言い合っている間に、どうせ自分では止められないと身の程を弁えた兎南木が、百百春の横に移動し、世間話を始めるかのようにやんわりと、止めるよう伝え始めた。
「さて、それでは部長、今からその墜落した山並に行くんでしょう？　善は急げ。さっさと行きましょうか」
「そだねー。電車で行けばすぐそこだし。それじゃあ二人とも！　痴話喧嘩は止めて、とりあえず駅まで行こー！」
「痴話喧嘩言うなし！　違うし！」
「ノーコメント」
正直、こいつらは大丈夫みたいだけど周りの異変の事もあるし、この記事の事をあいつに話したいからさっさと帰りたいんだけどなぁ、とヤス谷は神妙に思いつつ、まあ何か『アレ』の手がかりがあればいいか、と楽観的に考えていた。
この時までは……。

「あー、結局調べてもなんも見つかんなかったんだよなぁ……」
あの後、わざわざご丁寧に隕石墜落後まで行ったわけだが、しっかりと周りには黄色い帯が張られていて、クレーターには近寄れなかったのだった。それでも周辺を部員一同で捜索してみたのだが、やはり特筆するものは何もなかった。

もちろん、行き帰りの電車などにはどう見ても人外な存在が複数一般人と同じように行動していたが、そこれはもう慣れた。寧ろ隕石に近づくにつれて減っていったぐらいだったので大して気にならなかったぐらいである。

という事でぶつくさ言いつつも、すっかり日も沈み、『ブソウ』のメンバーはすでに解散し、ヤス谷は自宅の玄関前まで帰ってこれたというわけである。

玄関のドアは少々古臭いスライド式。

この扉を開ければ、晴れて日常カオス空間から帰ってこれる訳だ。

鍵を開け、開く。

小気味よい音がして、片方の扉がもう一方へとスライドされていく。

「ただいまー」

玄関から色々な部屋へと繋がっている廊下一本。

まっすぐ行くと家族が団らんしている居間がある。

ここでヤス谷家の家庭環境について説明しておこう。

親が二人そろって海外に出張転勤中。普段住んでいるのはヤス谷とその妹だけというちょっと特殊な家庭環境だ。気の良いご近所さんがよく夕飯を作りに来たり、そのまま家でゴロゴロしていたりするので、寂しかったり手料理に飢えることはあまり無いが。我ながら、ラノベのテンプレ的な家庭環境じゃね？　とか思うヤス谷である。

絨毯、炬燵、テレビゲームなどが配置されている約七畳半の居間。

そこに「おかえり」も言わずに炬燵にもぞもぞと潜りながら、ゲームに勤しんでいる輩がいた。Tシャツに短パン一丁という、この時期暖房が利いている部屋の中でしか出来ないような格好で、緑色の髪をもさもさと揺らしている。

その横で、半ばその髪に巻かれた形で同じく熱心にテレビゲームに打ち込んでいる奴もいる。

「何してんだ、お前ら」

「ぬおうっヤス谷さんじゃないですか。スマブラですよ、スマブラ。保美ちゃんとやってるんです。ピンクボールが強いのです」
「……おかえり」
ぼそっとそう言ったのは、髪に巻かれている方。
ヤス谷の妹である保美だ。
小学生として月並みな体型に、腰まであるロングな黒髪。
風呂上りらしく、すっかり水玉模様のパジャマに着替えている。
兄のヤス谷に似た無感情に見える目が目立つが、多分学校ではヤス谷以上にはっちゃけてるはずだ。内弁慶の反対という奴だろう。多分。
仕草といい見た目といい小動物を連想させられとても愛くるしい。家事や勉学もそつなくこなすので、ヤス谷にとってはかなり自慢の妹だ。正直、彼氏なんきゃ出来なきゃいいと思っている。しかし男友達が大勢いたりする。現実ってシビア。
「ただいま、保美。あー何か学校でおかしなことあったか？」
「……紀伊寺君が超能力に目覚めてた。あと花蟻ちゃんがカラーギャングのリーダーに」
保美の学校も色々とカオスなことになっているらしい。
というか超能力ならまだしも小学生がカラーギャングのリーダーってお前。
「つか紀伊寺君って誰だ。また新しい男友達か、おい」
「……反応するところはそこじゃないと思うけど」
「無視しないで下さいよー。てかその現象、あれですねぇ、ほら、昨日私が言ってた……」
「いや、聞いてねぇし」
「このやろー」
この緑髪の宇宙人。宇宙人ではなく異世界航行生命体という言うなれば、世界と世界を渡り歩く異世界人らしい。
異世界と異世界の間を渡り歩き、生存する存在。それが異世界航行生命体――だという。

その世界の情報を取り込むことができ、その世界でもっとも繁栄している生物とそれに伴う常識に合わせて自己を変換することが出来る。もっとも現在の姿と性格からすると上手くいっていないようだが。

色んな世界を渡り歩いているだけあって、人智を超えた技術を複数有しているらしく、昨夜の杖や後述の願望器もそれに当たるようだ。

そして願望器とは――単純明快。人の持つ憧れを現実のものとすることが出来る夢のアイテムらしい。もっとも緑髪たちには人間ほど効果は現れないらしいが。

そんな願望器を緑髪の同胞が『願望器をいろんな世界の人たちに渡せばみんな幸せになるじゃないか！』と言う考えの元、願望器をこの世界に転送してしまったという訳だ。しかしそれは世界の秩序を破壊する行為である為、同胞であるこの緑髪がわざわざ願望器の回収にこの世界位に来たという訳だ。

そこまでの事を炬燵に深く潜って、顔だけを出しながら得意げに呟く緑髪。髪には保美が巻かれている。

保美を髪に巻くのは止めろと言いたいヤス谷だが、どうやら保美自身が自分から巻きつきに行っているようなのでどうしようもない。どうやら新しい住人をいたく気に入ったらしい。

「あー、悪いけど殆どろくに聞いちゃいないからな。お前の話は」

「酷い！」

「ところでよ、その憧れとやらがかなった奴が自他共に全く変わりが無いのはどうしてだよ？」

「本人に憧れが現実になってる自覚が無いんでしょうね。だから他人もそれを認識できない。ヤス谷さん達が認識できるのは多分私を見ちゃってるからかもしれませんが、それしか思いつきませんからそういう事にしておきましょう」

つまり――、植物になりたいだとか、半漁人になりたいだとか、そういう憧れが本人も他人も気づかないまま実現されているという

事らしい
　今はまだ大して問題ないだろうが、いずれ自覚を持ち出せば、それらは本当に現実のものと化すのだ。
　そうなれば世界は破滅である。
「何とかならねぇのかよ。　つーか、願望器って一体何個あるんだよ？　もしかして昨夜の流星群の数だけか？」
「あー昨日の流星群は、単なるダミーですよダミー。私らに願望器の本体をつかまさないためのね」
「本体ぃ？」
「願望器っていうのは、粒子の集まりでしてねー。それを吸うことによって使用するわけです。
　普段は直径２ｍほどの石ころみたいな形なんですが、一旦発動されれば無数の小さな粒子となって風に巻かれていきます。
　粒子の一つ一つが力を持ってるわけですから、それこそ願望器は無数にあると言っていいわけです。
　ですが本体である力の特別強力な粒子がありましてね。それに停止命令を出せば、願望器は完全に機能を失うわけです。
　つまり本体を探し出して停止命令を出せば、晴れてこの騒動は止まり私は帰れるわけです！　やったね！　はっはー！」
「で、どうやって本体を見つけるんだよ？」
　そう問われた緑髪は炬燵の中に完全に潜ると、中からスマートフォンのようなものを取り出して腕と顔だけ出てきた。
「ドリームセンサ～。これは活動している願望器の有する力や存在する位置などを表記する機械なのです。これを使って力の強い願望器に片っ端から当たって行けば、いずれ本体が見つかるはず！」
「めんどくせぇ！」
「まあまあ、そう言わずにー。頑張って私が本体はこの町一帯に存在するという事を突き詰めたんですから、後は頑張ってくださいよー。ヤス谷さん♪」
「何で俺ががんばるんだよ！　お前ががんばれよ！」

「エー仕方ないですね、それじゃあ……」
そう言うと、緑髪は炬燵の中から這い出て、ゲームに向かって三角座りをしている保美に後ろから抱きついた。そしてそのままの状態で、ヤス谷を見つめながら、意地悪そうな笑みでこう言った。
「人質ですっ♪」
「てんっめぇ――」
「……メータさん重いんだけど。というかあんまり兄さんを刺激しないで。うるさいから」
「にゃーん♪　保美ちゃん人質扱いされてるのに超クールー♪　お兄さんとしてもこんな子を危機にさらすわけには行きませんよねー？」
メータと言う名前は、保美が昨夜、緑髪の自己紹介を聞いて付けた愛称だ。おおかた『異世界航行生命体』を『異世界高校生メイタイ』と聞き違えたのだろう。
それにしても会話だけ聞いていれば随分と殺伐とした状況だが、メータなど人質扱いと言う割には、保美に対して頬ずりまで始めている。
ものすごく気に入っちゃってるようだ。正直要求通りに動かなかったとしても傷つける気などさらさら無さそうだが、ヤス谷としては冗談では済まされない。何せ相手はこちらの常識が通じない異世界人なのだから。
「はあぁ……。分かったよ。で、どう頑張りゃいいんだ？」
「簡単ですよ！　ヤス谷さん！」
刹那で保美から離れると、鼻どうしがくっ付く距離まで、急速にヤス谷に近づいてきたメータ。そのままヤス谷に二つの道具を渡した。
一つはドリームセンサーなる機械。もう一つは――昨夜使用していた最終兵器だ。
肘ほどの長さの杖で「杖を突く」と言う使い方より、「何かに向ける」と言う用途に向いている形状。グリップはL字型になってお

り、角には銃器についているようなトリガーが付いている。――正直、杖と言うより、銃と言う感じだが、銃のように銃身が筒状になっていたり、マガジンやリボルバーは装着されていない。単なる棒にトリガーを引っ付けたような感じだ。威力は証明済みである。
「って、こんな危ないモン、俺にもたせんな！」
「大丈夫ですよー。エフェクトの割には殺傷力は持ってないんです。何せ唯の注射器ですから。これが発射した衝撃波を願望器を吸収した人間にぶつけることで、願望器を無効化できるんですー」
「そんなもんか……？」
「ただし、撃つ時までトリガーに指をかけない。目標以外に先を向けない。その他不用意に衝撃を加えない事ですねっ♪」
「何だか、とてつもなく怖くなってきたぜ」
「で、ヤス谷さんにやってもらうことは簡単です。今現在進行形でこの辺りに強力な信号が確認されていますので、ちゃちゃっとこの銃で、その信号を発している物をぶち抜いてきてほしいんですー」
「今、銃って言ったよねっ！？　ていうかなんでお前が行かないんだよ！」
「出かけたくないからです、以上！　センサーに表示されるので行ってきてください！　話しすぎて疲れました、保美ちゃーんスマブラしましょうかー♪」
「……ストック制で」
再び、コントローラーを持っていちゃつきだす二人。
ここに居場所は無いと悟ったヤス谷は黙って、寒空の下に身を投げ出していった。　決して世界平和の為ではない。

「ってここ学校じゃねぇか！！」
誰もいない、感覚的には延々と続く真っ白な廊下の中で、一人叫ぶヤス谷。
別に映画になったりはしない。

現在地。どこにでもある公立校であり、現在ヤス谷が通っている母校である。出て行ってからそう数時間も立っていない。学校に通うことが学生の仕事と言うが何も一日における活動時間の半分以上を過ごさなくてもいいんじゃないかな、とは何を隠そうヤスた……いや百百春の言である。ヤス谷の言じゃなかった。

樹立する地獄と言う名の教室へと続く扉。暗くなってきたとはいえ、運動部はまだまだ好評営業中なので、開いている扉もある。

無人という訳ではないし、ほんのりと人の気配もするのだが、大抵の運動部は体育館や運動場に出ている為、目下ヤス谷とすれ違うような人間は見当たらない。

「その割には、センサーはこの辺りを示してるんだよなぁ……」

ヤス谷は手に持っているセンサーを見下ろす。確かにセンサーはこの辺りを示している。正確には、この廊下に連なる教室の一室。もっと正確にはヤス谷の右斜め前にある教室からだ。一応扉は締まっているが、鍵がかかっているかどうかは定かではない。ひょっとしたら、中に標的がいるのかもしれない。

「どうなんだよ、おい」

そんなヤス谷の問いに答えるかのように、教室の扉が軽快な音とともに開いた。

すると中から蟹の胴体に人間の首から下をくっ付けたような蟹人間が、明々後日のジョーよろしく前のめりに倒れてきた。

「は？」

真っ赤な甲羅。ぎらぎらと日光のように輝く、両手の先端に付いた鋏。所々のパーツに限ればどう見ても蟹である。

しかしそれを？げているのはどう見ても人間のパーツであり、さながら鋏型のグローブと蟹の形をした被り物をかぶっているヒーロショーの悪役さんにしか見えない始末である。

だが更に異様なのは、蟹の甲羅に、半透明の剣や、日本刀、明らかに鞘に収まりそうもない仰々しい形をした剣など、無数の刃が刺さっていることだった。普通ならもっと驚くところだが、なんかも

う慣れてしまったヤス谷だった。
――この悪役のバイト（推定自給九八〇円）が願望器とやらの本体？　でも何故剣が刺さって……。
そんなヤス谷の疑問を解消するかのように、前のめりに倒れている『悪役のバイト（推定自給九八〇円）』を蹴り飛ばして、飛んでもない者が続いて教室から出てきた。
「あら、ヤス彦じゃない。こんな所でこんな時間に逢うなんて奇遇ね。いや危惧すべきなのかしら、この状況では」
「別に心配することは無いよー、変身してる限りは正体なんかばれないんだからさー」
「そうだったわねー。ほら、そこの学生。さっさと家に帰りなさーい」
教室から出てきたのは、蝙蝠のような羽がアクセントに付いたペレー帽らしき被り物をしており、肩にはウサギのぬいぐるみ（定価推定一二〇円。恐らく手作り）が乗っている。服はひらひらとひらひらが交差して物語が始まりそうなデザインのワンピースもどきに、二の腕に装着する袖のようなものといった、いってみれば魔法少女のような服装をしている。
銅杏楓である。
ヤス谷は知人の恐るべき服装に顔を引き攣らせて後退しつつも、今一番言いたいことを口にした。
「……ど、銅杏さん？　な、何でこんな場所で、そんなコスプレをしてらっしゃるんでしょうかー」
「え、ま、まさかヤス彦ッ！？　私が誰かわかるとでも言うのにゃッ！？
「逆に何でばれないと思ったのか聞きたいところだが、一応根拠を言っておくぜ！　俺の事を名前で呼ぶのは家族を含め、お前しか居ないんだよッ！　てか何で語尾が猫になってんだよ！　大丈夫か！？　色々と！」
「大丈夫じゃないわよ！！　何で私の正体が二秒で知人にばれてん

のよ！　答えなさいテルぅうううううううう！！」
　そう叫ぶと、銅杏は肩に乗っているウサギのぬいぐるみ（定価推定一二〇円）の首根っこを掴んで、縦へ横へと揺さぶり始めた。
　テルと呼ばれたウサギのぬいぐるみは特に苦しくなさそうで、表情を崩さない。いや当たり前だが。
「いや、ちょ、首根っこ掴まないでよ。かえでー。別にぼくは、絶対に誰にも全く完全に１００％、ばれないと言ったわけじゃないよ。そりゃあイレギュラーの一人や二人いてもおかしくないさー」
「よりによって！　そのイレギュラーが！　何で同級生なのよ！」
「あっはっはー、愛の力じゃないのー☆」
　バッズバババババババン
　ウサギのぬいぐるみがあった場所に、複数の奇妙奇天烈な刃が唐突とあらわれ、突き刺さる。
　無残にも原型を留めておらず、ぼろぼろと臓物（綿）が廊下に散らばるのみである。
　刃は宙に固定され、重力に従うことは無い。まるで銅杏が魔力で操っているかのようだ。
「――――おいおい、マスコット的なやつじゃなかったのかよ、今の。潰しちゃって大丈夫な訳？」
「あんなのいくらでも作れるわよ……。そもそもあれの本体は今のぬいぐるみじゃなくて、私の自立型スタンド的な存在らしいから全く問題ないわ。まぁもっと大丈夫じゃない事象が私の目の前にあるんだけどねぇ！！」
　ジャキジャキジャキィイイイン
　銅杏のひらひらとした裾から奇妙奇天烈、摩訶不思議、有象無象、魑魅魍魎の刃が無数に表れ、分度器の示す角度を現すかの如く、宙に浮いた。
　明らかに数コンマ前まで有する雰囲気が違う。
　例えるなら、カップスープのような帽公共機構のＣＭから、一転バイオレンスなゾンビゲーム売上向上ＣＭへと登場人物が変わって

しまったかのようだった。
「ま、待て銅杏話せばわかる！　何かがわかる！　分かり合える！」
「残念ながら、私が求めているのは分かり合いじゃないのよ。さ、私の変身姿を綺麗さっぱり記憶からなくしましょうねぇえええええ！」
どうやら、魔法少女姿は唯のコスプレでは無いらしい。否、唯のコスプレだったとしても銅杏が明らかに異様な力、――つまりはこの世のものではないデザインの剣や刀を裾から出して、どこぞのラスボス宜しく宙に浮かすなんて事に、願望器が関わっていることを否定することは不可能そのものだった。
案の定、センサーは先ほどより強力に反応している。なんかものすごいピコピコいっている。
どうやら、銅杏がこの場における本命、つまり願望器本体第一候補だったらしい。
「まずい。どう見ても俺を悪・即・斬しようとしてるとしか思えない。……先手必勝！」
懐から願望器無効化銃弾発射杖（以下無願銃）を取り出し、構えるヤス谷。
いくら向こうが百鬼繚乱な刃を発射してこようが、こちらが銃を構えれば単なる早撃ち勝負になる。そして相手がこちらに反撃の手は思っている以上、勝利はこちらのものだ。後は狙いを定めてトリガーを引けばいい。この勝負、勝てる！
「ってやっぱ無理だぁあああああああああああああ！！」
次々と針の寧ろと化していく廊下を駆けるヤス谷。
廊下を走ってはいけません、などと言っている場合ではない。
なんせ後ろには、次々と物凄い勢いで地面に突き刺さり、崩落させていく刃の軍勢が迫っているのだから。
横一直線に放てば、即座にヤス谷に当たりそうなものだが、どうやら照準はオートでホーミングらしい。シューテング宜しく動きさえすれば避けることが出来る。……理論的には。

実際には、こければ残基が減る、躓けば残基が減る、止まれば残基が減る、のスペランカー先生状態を攻撃がやむまで延々と続けなければいけないのだ。いや幾らスペランカー先生でも止まっても残基は減るまい。サメじゃあるまいし。

「無願銃なんて使ってる暇すらねぇじゃねぇか！　てかもうすぐ廊下曲がり角だし！」

どこにでもある学校の廊下が何？もあるはずもない。走って数秒で曲がり角である。だが、剣のホーミング機能は現状から見るにほぼ直線的。しかも劣悪。この角を曲がりさえすれば、状況を持ち直すことが出来る。

――くっ、曲がり切れるか！？

案の定、躓いた。

空中浮遊。

地面から、何センチか程上昇しつつ、僅かながらに前進するという、若き日のライト兄弟が聞けば目を輝かせるような快挙を前にして、ヤス谷の心中には、只々無が広がるのみだった。

しかし数瞬後、地面にすごい勢いでぶつかったヤス谷に刃の雨が降りかかることは無かった。

何事かとヤス谷が鼻血を抑えながら、後ろを振り向いた。

そこには刃突き立つ廊下に立つ黒い影がいた。

ゆらめく鴉の羽のような長い髪。

服装は、炎のような明色のジャージ一貫。加えてやけにファンシーな手袋も装着。

素顔は、Ｖ字型の装飾が付いたフルフェイスヘルメットで隠されている。

まるで特撮ヒーローのような見た目だった。

背身長は１７０ｃｍ後半。ヤス谷と同じぐらいだ。

もう一人同じ背身長の人間をヤス谷は知っていたが、とりあえず考えないことにした。

何だか髪を下してこういう格好しているだけの我が部の部長と、

後ろ姿が酷似しているような気がしたが、ヤス谷は全く考えないことにした。
「なっはっはー！　正義の味方！　百百春ちゃん参上ー！」
確実に、今、自分の名前を大声で語ったような気がしたが、ヤス谷はもう全く関与しないことにした。
この正体不明のヒーローの名前は、ハンドレット・ケントゥムという事にしておこう。
ヤス谷はそう決意したが、多分その決意も何分か後には無残に砕かれるのではないかという予感が、まったくもって止まらなかったのである。
「斗真！？　あんた何その恰好は！」
数分も持たずに現実を叩きつけられた。
ちなみに魔法少女のような格好をしている銅杏の言である。
誰もお前に言われたくないだろう。
「誰だお前は！　私は正義の味方……、えーっと、チャリンコライダーだ！」
さっき本名言ってたじゃねぇかと言うツッコミは無しみたいだった。
というか、百百春の方は、変身した銅杏の正体に気づいていないようだった。
あるいは、気づいてないふりをしているのかもしれない。
哀れというか、何というか、何というか気遣って。
勿論百百春はそんな細かい気遣いが出来るような人間ではないので、絶対に違うのだろうが。
しかし、ヤス谷にとっては幸いなことにまたこれで空気が変わってきた。
ヤス谷には悪・即・斬な対応の銅杏も、百百春に対しては刃を向けようとはしていない。
それどころか、突然現れ、しかも自分の正体が気付かれていないという現状に、少なからず動揺、そしてむず痒しさを露わにしてい

る。
具体的には、うーうー唸りそうな表情をして、宙に浮かしている刀を小刻みに震わせているといった感じだ。
「百百春はともかくとして、銅杏は若干その気があるからなぁ……」
誰にも聞こえないような、というか思考とも言葉とも及びつかない、小声でヤス谷はぼそっと呟いた。
図式化するなら『銅杏→百百春』である。その気に関しては反対も交互も無い。
いや、そんなガチじゃなくて恐らく友人関係の延長みたいなものだろうが。
本人もおそらく気づいていないだろうし。
決して百百春の百は、百合の百では無い。そう願いたい。
と、ヤス谷が同級生でそんな妄想をしている間にも、話は進む。
「だーかーらー！　悪党っていうのは！　アンタの後ろにいる、そのクソヤローのことだって！」
「ふっ、私の部員に悪党が居るはずないだろう！　つまりそれを攻撃する、正体の知れない君こそが悪党なんだよっ！」
「いや、あたしも部員だから！」
「へぇ？　じゃあその正体を教えてもらいましょうか？」
「ぐぬっ、ど、どうせならあんたも初見で気づけばよかったのよっ！　こんな恥ずかしい格好しながら自分の正体教えるなんて、どんな羞恥プレイなのよ！」
「何それ萌える」
「う、うるさいっ。こうなりゃ斗真！　あんたごとぶちのめして、全員チート魔法で記憶を消去してやるわ！」
「はっはー！　望むところだーっ！　行くぞ楓！」
「やっぱ正体ばれてんじゃねぇえかぁあああああああああああ！！」
銅杏のキャラ崩れした咆哮と共に、幾多もの非現実的な刃がミサイルのように百百春に向かっていく。

百百春もおよそ人間とは思えないラッシュによって、その刃を精密かつ大胆に撃ち落としていく。
そんな二人の殺し合いともつかぬじゃれ合いを傍目に、ヤス谷は、先ほどの二人の会話を危ない方向に妄想していた。
結局、その後二人の戦いは引き分けに終わり（記憶を消せなかった点で銅杏の完敗な気もするが）ヤス谷は無願銃を使うことなく、家路につき（そしてヤス谷はあの後何もしなかったのが意外にもメータさんが怒ることは無かった）、スマブラによって他住人二名を圧倒し、圧勝し、圧制を楽しんで徹夜することになったのだった。
「無駄無駄無駄無駄ぁあ！　帝王はこの俺！　依然変わりなく！」
「強ぇええ！　この人永遠の二番手で強ぇええええ！　あぁあぁまた私のキャラが世界に囚われてる！」
「……兄さんのスマブラ力は５３万。私たちでは拮抗すらしうれない」
今日のところはそんなところで終了である。
次の日、事件が急展開を迎えるとは、この時だれも予想していなかった。

いつもの朝。
ありふれた日常。
今日があるなら明日もある。
そんな当然でどこにでもありふれた事のことを、ヤス谷は朝の教室で、さも重要そうに噛み締めていた。
何故ならば。昨日と同じ今日が目の前に広がっているからだ。
半漁人。肉々しい植物。エルフ。ドワーフ。超能力者。妖刀使い。忍者。海賊。獣人。魔術師。格闘家。美食家。ギャング。マッドサイエンティスト。サイボーグ。ドラゴン。勇者。エクソシスト。殺し屋。アイドル。エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ、ｅｔｃ．ｅｔ　ｃｅｔｅｒａ……。

「昨日より確実に増えてやがる……ッ！」
もはや普遍的な学生をやっているのは、見た目だけでも一割ほどにも満たない。
他九割が、海賊的な衣装をしていたり、日本刀と語り合っていたり、普段つけない黒いマフラーを巻いて天井に張り付いていたり、白衣だったり、機械音がしたり、飯を食っていたり、黒い袈裟を羽織っていたり、部下を連れていたり、竜だったり、炎出したり、瞬間移動してたり、頭が獣だったり、上半身裸だったり、『キラッ☆』してたり、伝説の剣を持っていたりするのだ。
訂正しよう。
昨日と同じ今日など、やって来ることは絶対に無い。
思えば、通学中からそんな予感はしていた。というか、そんな予感しかしていなかった。
確実に異形の量が目測で測っても増えていたからだ。
このままでは確実に自己が普段と違うと認識しだすものが出てくるだろう。すると、この風景はヤス谷個人の幻覚ではなくなり、真実味を帯びてくることになる。
そうなれば、世界は破滅だ。
何せ星の数ほどある漫画やアニメを、ごちゃまぜにするような事だ。世界観が崩壊しないわけが無い。
つくづく漫画やアニメの世界ってよく出来てるよなぁ……。
そう思わずにはいられないヤス谷だった。
「いやはや、相変わらず世界は歪んでおりますねぇ、ヤス柳ー」
「人の事を芸能人がやって来る部屋の主みたいに言うな。変身ヒーロー」
後ろには相も変わらず半漁人。隣にはやけに大阪っぽい名称の変身ヒーロー（変身前）がそこにいた。
百百春斗真だ。
「何しに来たんだよ、部長。早く自分のクラスに帰れよ」
「ヤス木原。私は元から君と同じクラスだよ？」

「人を学園都市最強の超能力者を拳一つでぶちのめす様な愛称で呼ぶな！　まあ確かに同じクラスだったよな、そういや」
「後付け設定だけどねっ！」
「そーいう事言わない」
後付け設定最強だった。
というか、ニックネームは一回ごとに変わる設定だったのか。
昨日は疲れてたのか、いや面白くなりすぎだろ。
そう思わずにはいられなかったヤス谷だった。
百百春は、椅子に座り、綽々と読書に励んでいる。
勿論エロ本などではなく、かなり分厚い現代小説をだ。百百春に読書方面に関して妙な設定は無い。後付けも皆無である。
ちなみに今日の髪型はポニーテールである。気分で変える癖があるのだ。
「しかし百百春。お前、読書しながらよく本なんて読めるよな」
「周りがとんでもない幻覚現象と化しているのに、まともにバカ話できるヤス蚤の方がすごいと思うけどねー」
「その割には愛称がしょぼいぞ……。つーかお前だって周りが変なの分かってんだろ？」
そう。昨夜判明したことだが、百百春斗真、彼女は自分の変化を自覚していた。
変化を自覚している人間は実際にその変化を現実のものへと昇華できる。
願望器の能力は憧れを現実に変えることだ。
端的に言えば、百百春の憧れは変身ヒーローだった。
正確に言えば、変身ヒーローに憧れて、玩具の変身ベルトなどを装着して遊んでいた、幼少期の百百春の兄に憧れていたらしいのだが、そんな事は本人にとっては浅薄希薄な事に成り果ててしまっていて、只々変身ヒーローへの憧れが深層意識に残ってしまっていたらしい。
しかしそんな裏設定をヤス谷達が知る由もないし、知る必要も無

いので、本編で百百春の兄の出番は無い。
「どうかなぁー。私的には単なるお祭り騒ぎと言うか、夢心地というか、そんな微妙な感覚だけどねー。まともに現状を理解できてるのは多分ヤス乃宮だけじゃない？」
「俺をそんな大豪邸のお嬢様みたいな愛称で呼ぶな。つーかさっきの蚤はそれの伏線かっ！？　まともに現状を理解できてるのは俺だけ、ね。正確にはもう二人居るんだけどな」
　一人はその原因みたいな奴だから実際はあと一人か、と心中でヤス谷は付け加える。
「まあ、私は平穏無事に過ごせればそれで構いませんけどねー」
「誰よりもお祭り騒ぎが大好きな奴が何言ってやがる。実際俺は、お前が願望器の本体、つまりこの事件の犯人なんじゃねぇかと思ってるぐらいだぜ？」
「ちっちっちっ。分かってないねヤス杉ぃー。この場合、特別なのは私みたいに変化している人間じゃなくて、君みたいな……」
「人をスーパーの大安売りを始めて見た女子高校生が放った一言みたいな愛称で呼ぶな。……ってどうした？」
　教室の入り口を見つめながら、急に黙りこんだ百百春。
　一体どうしたのかとヤス谷も、教室の入り口を眺めてみるとそこには、
ガラッと軽快な音と共に、ところてんを押し出したかのように入ってきた木々の枝のような物体があった。
　似たようなものが教室にもある（いる）がこちらは既に廊下一面に満載しているようで、狭い入口に無理やり体を押し込んで教室に入ってきている。
　どうみても量とサイズが桁違いだ。
「ヤスレデンガー、あれ鍵先じゃ……。ていうかあれ、まずくない？　ほっといたら自覚とか関係なく、学校を埋め尽くすことになるよね。あれで」
「多分、ものすごくまずい」

人をとんでもない実験で箱に幽閉されるような猫みたいな愛称で呼ぶな、と言うツッコミをヤス谷は忘れていた。
枝の壁はめきめきと教室に入り込もうとしており、このままでは確実に教室もアレで埋め尽くされる空気だ。
「おい、百百春。変身してどうにかしやがれ」
「人使いが荒いねぇー。山谷君は」
「それ別人」
無駄話をしながらも、椅子から立ち上がり、変身ポーズらしき格好をとる百百春。
しかし、ふと何かを思い立ったようにポーズを中止する。
「大変だよ！　山崎！　ここで変身したらいくらなんでも正体ばれちゃわない！？」
「……え？　いや、今それ気にする？　こまけぇこたぁ良いんだよ！　もう完全に愛称に実名と一致するところが無いとか、こまけぇこたぁ良いんだよ！」
全然細かくなかった。
立ち上がって身振り手振りで表現するほどだった。
何せ、枝の壁はもう教室の扉を破ってヤス谷の首筋まで届かんとするばかりだったのだから。
ズザブサズザザザッブサッ、ズザザザザザザザザザザザザザザザザッ！！
瞬間、枝の壁ですでに埋まりつくしている廊下を複数のラインが走って行った。
同時にその勢いにつられて、ヤス谷の首筋まで届かんとしていた枝まで薙ぎ払われていく。
森をチェーンソーの暴風で伐採していくかのように、見えない斬撃に切り刻まれていく枝の壁。
瞬く間に廊下にあった枝の壁は、単なる薪の群と化していく。
根元から払われ、教室に枝が伸びてくることは無くなった。しかし、今廊下に出ていくのはどうも危なそうだ。

「うおらぁあああああ！！　朝の昼寝の邪魔すんじゃねぇえええええ！！　木々ごときがよぉおおおおおお！！　大人しく業務員さんに刈られとけやぁあああああああ！！」
「おーいけいけー楓ちゃーん」
教室を二つぐらい跨いだ先の廊下辺りから、魔法少女とその自立型スタンドの声が聞こえてきた。
先ほどの複数のラインは、彼女達によるものだろう。
朝の昼寝の邪魔をされて気が立っているのかもしれない。というか朝の昼寝っていったい何だ。そんな事はヤス谷にとっては細かいことだったのでツッコミは省略された。
ポンッ。
誰かがヤス谷の手に肩を置いた。それはまるで「君、明日から来なくていいよ」と宣告する部長のように。
振り向くと先ほどまで天井に張り付いていた黒いマフラーのクラスメイトが居た。
「……何かな？」
ヤス谷がそう聞くと、そのクラスメイトは何やら面妖な趣で、重々しくこう口にした。
「こんな時だから言うけど……実は俺、忍者だったんだ……」
衝撃。
突然の告白。
誰もが知らなかった真実。
訪れる一瞬の静寂。
それは一瞬のようで永遠のように感じられた。
永遠の静寂を破るかのように、ヤス谷は実に精悍とした趣でこう返した。
「だろうねぇえええッ！」
その一言がトリガーになったのか、周りのクラスメイトも自らの正体を暴露し始める。
「あーお前忍者だったの？　マジでー。俺海賊」

「私のこのラケット、実は妖刀なんだよね」
「伝説の勇者がここにいるって言ったらどうする？」
「殺意の波動に目覚めた俺」
「なあ、聞いてくれよ。実はさっきから右目が……」
「大魔法使いに俺はなるっ！」
傍から聞いていると『クラス主催、みんなのドキドキ黒歴史製造大会☆』だった。
既に正体を明かした奴らの一部は、廊下にて、枝と刀とその他もろもろエフェクトが炸裂する大乱闘に参加している。
さながらスマブラだった。
「……と、いう事は俺が帝王か」
最も地味な永遠の二番手にして、最凶最悪。
世界を支配する秘技の持ち主。
大乱闘の帝王。
緑の支配者。
グリーン・ザ・マッドワールド。
だが、それはゲームでの話だ。
「それに俺、弟じゃなくて兄貴だしなぁ……」
とりあえず。
独りよがりの独り言を自己完結させ、状況確認するヤス谷。
どうやら、覚醒した人を見て覚醒――という方法で、ネズミ算式に覚醒してしまっている人数が増えているようだ。
クラスの中だけでもこれなのだから、外なんてもっと酷いことに――。
そう思って、ヤス谷は外壁側の窓の外を眺めてみた。
見慣れた街の俯瞰で、ロボやら戦闘機やらが飛び回っていた。
ヤス谷は振り返って、鍵宮先生だったはずの枝の壁がまだ生えている廊下に向かってこう言い放った。
「先生。ちょっと世界救ってくるんで、早退させていただきます」
止める声は無かった。

しかし早退するにしても、廊下は完全に大乱闘状態である。
ごくごく普通の一般市民であるヤス谷が、加わろうものなら、一瞬で場外に吹き飛ばされる。
こんなカオスな状態なんだから、超能力の一つでも発現してくれればよかったのにと思わずにはいられないヤス谷だった。
「さーて、どうやって脱出しますか」
別にただ帰りたい訳ではない。いや深刻に家に帰って布団の中に潜り込みたいが。
この状況、メータさんなら何らかの解決策が見いだせると思っての事だ。そしてメータさんはこの時間なら多分家で寝入ってしまっている筈。あの人用事無いもんね。
某国民的アニメだって、こういう時は未来から来た猫型ロボットに相談するのがお約束なのだ。ならこういう時の解決策は一つ。そういうポジションの奴に相談するのが筋と言うものだろう。
問題は、どうやってこの密室から脱出するかという事だ。
誰か探偵呼んで来いと思わざるを得ないヤス谷だった。
「……確か、従姉がそれっぽい事してたな」
腕を組んでそう呟くヤス谷。
さっきから独り言の多いヤス谷君だった。
現実逃避している証拠である。
「そういや百百春は？　急に居なくなったけど」
「ひゃっはっはっはっは！！　いやー！　たーのしぃねー！　こーゆうの！」
「またあんたね！　斗真ぁあああああああああああああああああああ！！」
目を離した隙に大乱闘に参加していらっしゃった。しかも最前線で。
目にも止まらぬラッシュで、触れるものすべてを鎧袖一触している。
変身ヒーローの割にはかなりのチートだった。

クロック・アップしているのだろうか……。
とにかく、百百春に頼んで脱出するルートは無くなったようだ。
「窓から脱出……、いやここ確か四階だったな」
「お望みなら、送って行こうかい？」
突然の軽やかなエンジン音。巻き上がる風。
外壁側の窓の外を見ると、宙に宇南木が居た。上半身だけで、下半身は壁で隠れている。
Ｆ１レーサーが着ているような銀色のライダースーツに、腕にヘルメットを抱えているという格好。
きざっぽく、髪をふさぁと、軽やかに風で靡かせている。
「どうも、宇南木です」
「いや誰だ、お前」
「君と同じ部活動をしている宇南木ですよ、ヤス谷君」
「台詞が二行しかないような奴、俺は覚えてねぇな」
「やれやれ……。それより事情は大体、部長と君から聞きました。お急ぎなんでしょう？　送って行きますよ」
「俺？　喋ってねぇけど？」
「じゃあさっきからのアレ、独り言ですか？」
やれやれ、と首を振る宇南木。
最早こいつが主人公で良いんじゃねぇの、と思わざるを得ないヤス谷だった。
しかし残念ながら、宇南木。彼は今回主人公でなければ、出番もあんまりない。
「どうやら、俺が主役でも無いようだしな」
「何の話です？」
「いや、この事件の犯人が分かったんだよ。ま、暴論だけどさ」
最後のは従姉の口癖だ。
やはりここは探偵らしく閉めるべきだろうし。
「さて、ちょっと送ってほしいところがあるんだけど。どうやって送るんだ？　お前」

「ああ、そこからは見えませんかね？　これ」
「あん？」と言いつつ外壁側の窓に近づくヤス谷。
窓から半身を出して下を眺めてみると、ちょうどAの形になっている、近未来風のコンパクトな飛行機が宙に浮いていた。宇南木はそれのコックピット席に登場している形である。
「成程ね。探偵も吃驚の密室崩しだ」
うちの従姉は寧ろそんな事件ばっかり解決してるけどな、とヤス谷は心中で付け加えた。
何だか気づかないうちに次回作の宣伝してるなぁとも密かに思った。

「お、おまぁあああああああああああああああ！！　速度おとせぇえええええええええええ！！」
詳しい速度は分からないが、しかしとてつもない速度で上空を駆けるマシン。
Gの方もとんでもないことになっており、ヤス谷は完全にグロッキーだった。
マシンは二人乗りで、運転手である宇南木が前。ヤス谷が後ろと言う構図だ。
機械音や風を切る音が強すぎる為かヘルメットに無線機が添えつけられており、相手の声だけはやけにはっきり聞こえる仕様になっている。つまりヤス谷の声ははっきり宇南木に通じているはずなのだが――。
「え？　何？　聞こえないよ？」
とまあ、そのような事を何の動揺もなく、言ってくるあたり奴は大物だった。
しかしその甲斐あって、この速度だと数秒もたたずに目的地にたどり着くはずだ。
いや、もう目的地を通り過ぎてしまっているかもしれない。

「あ、まずい。ヤス谷君。目的地まで送れないかもしれない」
「はぁ！？」
突然そのような事を言い出す宇南木。一体何があったのかと思うと、
「ここぉでぇえええあったがぁああひゃくねぇえええんめぇえええ！！　かぁあああくぅうぅうぅうごぉおおおおしろよぉおおおおこのしろいのぉおおおおお！」
何か物凄い野太い感じの声がヘルメット付属の無線機から聞こえた。
「な、何だ今の！？」
「敵機だよ、ヤス谷君」
そう言って、背後をかっこよく親指で指差す宇南木。
ヤス谷がその方向を振り返ると、すごい勢いでロボットアニメにありがちな派手なカラーの人型決戦兵器がこちらに向かって飛んできていた。
「どうすんだよ？」
「一応このマシンは人型に変形できますから、迎撃しますよ。まあその代わりにヤス谷君を送ることが出来なさそうなので……、あ、言って間に着きました。下しますね」
ぽちっとな、と昔のアニメのような台詞を呟きながら宇南木は何か赤いボタンを押した。
ほぼ同時に、ヤス谷の座っているソファからシートベルトのようなものが巻きついたかと思うと、そのままソファはマシンから地面に向けて射出された。
「ちょっとぉおおおおおおおおおおおお！？」
臓物が置いて行かれるような浮遊感。
既にかなりの上空にある先ほど乗っていたはずのマシン。明らかに物理的に不可能な変形を始めていた。
ソファからいきなり射出される、赤いパラシュート。その赤さはまるでトマトのようだ。

次いで現れたのはそれを取り囲む茶色。
枝だ。
恐らくはどこかの雑木林に着陸したのだろう。落ちていく感覚も無くなっている。
都合よく地面から数センチのところで止まっている。これなら降りられないということもないだろう。
ヤス谷は何とかベルトを外すと、シートから離れて地面に降りた。
「どこだ、ここ……」
ヤス谷が辺りを見回すと、自分の家がすぐそこに見えた。
「なんだ、近所の雑木林か」
状況確認を済ますと、速攻で目的地に向かうヤス谷。
家を取り囲んでいる垣根をかき分けて入っていくと、板の間が露出している庭に出た。
サザエさん家の庭とでも言えばいいのだろうか。まあ、そんな感じだ。
空では、相変わらずロボが弾幕の弾幕による弾幕の為の空中戦を繰り広げている。
そんな空を、こんな庭でもの珍しそうに眺めている女子が一人いた。
妹の保美である。
垣根をかき分けて庭に入ってきた、葉っぱまみれの兄に気づいた保美。
驚きもせず、無表情のままである。
半目がちだ。
「……あれ、兄さん学校は？」
「早退したよ。お前こそ学校は？」
「今日は開校記念日」
「そうだったっけ？」
「そう」
「えー、あー、そうか。あ、メータさんはまだ寝てるのか？」

保美は黙って、障子が開かれて明け抜けになっているリビングを指差した。
リビングにはさながらゾンビのように炬燵の中から手を伸ばしているメータさんが居る。どうやら、開かれた障子から入ってくる冬の寒さを嫌って、炬燵の中に潜り込んでいるようだ。
「本当に使えねー」
「で、何で早退してきたの兄さん。まあ、頭上の弾幕戦を見る限り大体予想できるけど」
「お、察しが良くて助かるよ妹よ。お前の予想通り、頭上の弾幕戦が原因の一因であることは確かだ。しかし俺が戻ってきたのにはもっと深い理由がある。まずはメータさんを拾ってからお前の学校に行くつもりだったんだけど手間が省けたよ。さて、いよいよ解決編だ」
「……解決編ってイトコの安理ちゃんにでもなったつもり？」
「うるさい。この一連の事件。通行人のキャラが濃くなったり、部活仲間が日曜朝アニメの仲間たちになったりしてることだな。これはそこのリビングにいる自称異世界航行生命体、メータさんのゆかいな仲間達が作り出したいわゆる『憧れを現実に変える力』が、この町の住人にさもインフルエンザウイルスのように広く渡ってしまった事が原因だ。さて、これを止めるには、この『憧れを現実に変える力』のメインコンピューター、つまり本体を見つけなければいけない訳だった。で俺はこの本体がその他大勢と一体何が違うのか考えてみた。メインコンピューターである訳だから、その他大勢が叶えた憧れによって本体の憧れが阻害されることは無いわけだ。そしてその他大勢は一応、憧れを現実に変えてしまっているわけだが、憧れっていうのは要するに、例えば『超能力漫画の主人公』とかであって、別に『能力が使えるだけの普通の人』では決して無いはずだ。何故そんな中途半端な状態になってしまっていると前述した本体の憧れには逆らえないせいだな。あー、まー、要するに結論から言ってしまえば、犯人は『その他大勢に決して矛盾しない憧れを現

実に変えてしまっている』人間ということになる」
「……急に饒舌になりましたね兄さん」
「黙ってろ。しかしこれだけでは犯人を特定することは俺らには不可能だ。だがもう一つの要素を加えれば、綺麗に今俺らの知っている人間の範疇で犯人が特定できてしまえるんだよ。何だと思う？」
「さあ、皆目見当が付きません」
「メータさんだよ。漫画やアニメで見たような設定なら別に憧れであってもおかしくないが、『自分が異世界航行生命体などと自称する、宇宙人的なもので、ある日突然唐突に空から誰かの下に落ちてきたい』なんて憧れを持つ奴なんて普通は居ない。つまり彼女は本物のそれか、誰かの憧れによって作り出された憧れである訳だ。まあ現実的に考えて憧れだろうがな。そしてそうすると、メータさんが本体ではなくその他大勢の能力によって作り出されていた場合、この願望器とやらを発見するアイテムやそれを無効化するアイテムに矛盾が生じてくる事になる。必然的にメータさんはこの能力の本体から生み出されたことになる訳だ。で、メータさんが空から落ちてきて今まで関わって人間は俺とお前しかいない。保美、お前姉さんが欲しいとか言ってたよな」
「……いったい何が言いたいの兄さん？」
ヤス谷は懐から『無願銃』を引き出すと、それをそのまま保美に向け、こう宣言した。
「お前が犯人だ、保美」
その宣言を、あたかも予測していたかのように、保美は微笑みつつ、答える。
人差し指をさながら探偵のように自らの兄に向けて。
「いいえ、兄さん。犯人はあなたよ」
リビングのメータさんが炬燵からさながらゾンビのように這い出してきていた。
メータさんはズルズルと怠惰そうにリビングをゴロゴロと転がり始める。

庭で見つめ合う二人に気付くと、片手をこれまた怠惰に上げて挨拶した。
「や、二人ともー。もう帰ってきたんですかー？　もっとゆっくりしていってね」
「メータさんももっとゆっくしてて良いよ」
「というか、寝てろ」
緊張状態の二人には冗談の入り込む余地が全く無かった。
ヤス谷など今にも、保美けて構えた『無願銃』のトリガーを引いてしまいそうなぐらいだ
そんな状況にも関わらず、相も変わらずメータさんは現状を理解出来ていなさそうに、目を袖でぐしぐしと擦っている。
「さて続きだ。答えてもらおうか。……何で俺が犯人になるのか」
「何でも何もさっきの推理は兄さんにも当てはまるから。それに兄さんの場合はもっと明確に犯人らしい状況に逢ってる」
「推理ごっこですかー？」という的外れな推論と共に首をかしげるメータさん。
もはや兄妹には相手にする気すらも無いようで、リビングには目もくれず、蛇のように双方睨み合っている。
「そもそもメータさんが落ちてきた前々夜から、この現象は始まっている……、メータさんに最初に遭遇したのは兄さん！　あなたなのよ！」
「……っぐはぁ！！」
さもボディーブローを食らったかのようにくの字に折り曲がるヤス谷。妹に言い負かされたこと、いや妹が言い返してきたことがよほどショックだったようだ。それにしても証明にもなっていない証明、論破にもなっていない論破の応酬だ。
「いや違うっ！　これは罠だ！　犯人はお前のはずなんだ！　おかしなことを言うんじゃない！　そもそもその理論は、あ、あ、ああ穴だらけじゃないか！」
「それを言うなら兄さんだって」

半ば狂乱風に、激しく身振り手振りを使って、自らの潔白を訴えるヤス谷。
そしてそれを斜に構えて、半目がちに眺め続ける保美。
話についていけないので、そろそろ飽きてきたメータさん。胡乱気味に蒼天で繰り広げられる強大な空中戦を眺め始めた。
爆発するミサイルがさながら花火のようだ。
さきほどまで宇南木が乗っていたはずのマシンは何倍にも大きな人型ロボットに変形しており、どう考えても質量保存の法則に伴っていないことが一目でよく解った。
二基のロボットはしばらくは均衡状態を保っていたが、やがて宇南木のマシンが押され始めてきた……、が間一髪という処でアニメ展開のように逆転一発大勝利。破損した部分から煙を出してロボットが墜落を始めた。具体的にはヤス谷家に向かって。
「あ、ヤス谷さーん。保美ちゃーん。上、上ー」
「う？」
「え？」
一瞬、ヤス谷家から日光権が根こそぎ奪われた後、とんでもない巨大な何かの墜落音がした。
ハトが飛んだ。

いつもの朝。晴れやかな朝。今日の天気予報は雨である。
ヤス谷は、いつものように教室にてライトノベルの本を読んでいた。ここ数日まともにできなかった行為だ。
もう、辺りに妙なものは見当たらない。
後ろの根倉さんも半漁人じゃない。
具体的には学園指定の制服に、目が隠れるぐらいに前髪が長めのストレート。体型はスレンダーとグラマーのちょうど中間といったところか。すらりとした鼻、柔らかそうな肌、小さめのおちょぼ口。言うなれば、目立たない系の美人である。もう鱗は生えてないし、

異様にギョロギョロとしていない。
黙々ときちんとした姿勢と机に座って読書しているさまは半漁人の時とは違って、人目には付きにくいが、注目すればとても可愛らしかった。読んでいる本が少々常軌を逸している感は否めないが……。
しかし、まあそれよりも重要な項目が残っているので、そちらをまず片づけることにしよう。
昨日、あの後、どうなったのか。
簡潔に言えば、落ちてきたと思ったロボットは落ちておらず消失していた。
何が起こったのか一切分からなかった。パラシュートで宇南木もゆっくり落ちてきた。着陸と同時にパラシュートも消えた。
ヤス谷達の話を分かりやすく聞いたメータさんによると、二人の推理はまあ、どちらも半分当たっていてロボットが落ちてきたことに危機感を覚えた二人のうちどちらかが持っているはずの願望器は緊急停止してしまったのだという。ちなみにメータさん本人曰く、自分は願望器が作り出した存在では無くて本物らしい。結局どちらが願望器の本体を所有しているかは分からず事態は収拾したらしかった。メータさんも様子見の為、しばらく居候を続けるようだ。
「ま、一応解決したんだよなぁ……」
「何の話ー？」
隣の席から、百百春が話しかけてくる。
眠たいのか机に俯せて、顔だけをこちらに向けている状態だ。
「部長が変身ヒーローとして、事件を解決する話はいったん終了したという事です」
「はい？　ますます何の話かわかんないぜ。よしヤス君、暫く仮眠をとるので、ＨＲが始まったら起こしてちょ」
「人を犯人の代名詞みたいな名前で呼ぶな。……ってもう寝てるし」
既に大きないびきをかいて眠っていた。早すぎる。二秒も無かっただろうに。

まあ、このように街の住人からはこの二日間の記憶が一切消えているようだった。間違っても自分が変身できたとか、半漁人だったとか、変形人型ロボットのパイロットだったとか一切覚えていない。そんなものはアニメか漫画だけの世界だ。

結局、いったいこの二日間は何だったのかと、妙に一人心地で考えてみるヤス谷。

最後に残ったのは異様な思い出と図々しい居候だけだった。……まあ、それでもいいか、とメータさんを思い出して結論し、ヤス谷は椅子の背もたれに身を預けて大きく背伸びをした。

ふと窓の方に目をやると、何か青々しい人型の何かが窓に張り付いていた。見ないことにした。

同時に教室のドアが開く。

以前より成長した若木を頭に乗せた鍵宮先生が、ドアの登頂にぶつからない様伏せ気味に入ってきた。

部長を起こさなければ、と言う気持ちと、とりあえず冷静になれ、俺と言う気持ちがヤス谷の中で湧き起ってきていた。

また面白いことになりそうだ、という気持ちも少し湧き起っていた。

彼の愉快な物語はまだまだ始まったばかりだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4581t/

困った時のヤス谷君

2011年5月22日02時25分発行